

東日本支部だより

2009年11月18日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

定例研究会のお知らせ

◆東日本支部第47回定例研究会

時 2009年12月5日(土)午後2時30分～4時30分

所 東京芸術大学音楽学部 5-301 教室

(JR上野駅公園口または地下鉄千代田線根津駅下車)

*開始時刻が通常より30分遅くなります。ご注意ください。

1. 報告 1: 何故、E.S.モースは『日本その日その日』の絵を描き変えたのか—E.S.モースコレクションにおける日本音楽関係資料調査報告—

茂手木潔子(有明教育芸術短期大学)

2. 講演: ホワイト・ミュージアムとモースコレクション

Michale Lang (ホワイト・ミュージアム館長)

3. 報告 2: もう一つの『日本その日その日』

—E.S.モースの孫 キャサリン・ホワイトの手紙—

Lynne Huras (ホワイト・ミュージアム学芸員)

通訳 (講演・報告 2): 早稲田みな子 (東京芸術大学)

司会: 前原恵美 (有明教育芸術短期大学)

◆東日本支部第48回定例研究会

*正式の例会通知は1月にお送りする予定です。

時 2010年2月6日(土)午後2時～

所 東京芸術大学音楽学部 5-301 室

(JR上野駅公園口または地下鉄千代田線根津駅下車)

1. 講演: 十二ムカームの伝承と演奏技法 (仮題)

アブドケリム・ウスマン[阿布都克力木 吾斯曼]

(新疆芸術学院)

2. 研究発表: ウイグルの鼓吹楽について(仮題)

アブドセミ・アブドラハマン[阿不都賽米 阿不都熱合曼]

(東京芸術大学)

3. 報告: 自動採譜のインタラクティブ・アプローチについて (仮題)

フベルトス・ドライヤー、新堀敏乃 (東京芸術大学)

司会: 高松晃子 (聖徳大学)

定例研究会発表募集

東日本支部では会員の皆様による活発な研究活動のため定例研究会での研究発表等を募集しております。発表を希望される方は、発表種別 (研究発表・報告等)、発表題目、要旨 (800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先 (住所、電話、Fax、E-mail) を明記の上、東日本支部事務局までお申し込みください。

定例研究会の報告

◆東日本支部第44回定例研究会

時 2009年6月6日(土)午後1時30分～4時30分

所 有明教育芸術短期大学 301 教室

司会 谷口 文和(亜細亜大学短期大学部)

●研究発表(博士論文)

1. 十二ムカームの様式研究

アブドセミ・アブドラハマン(東京芸術大学大学院)

(発表要旨)

本発表は、ウイグル伝統音楽の代表とみなされている十二ムカーム(カシュガル・ムカーム)の旋法的側面について考察することを目的とする。

カシュガル・ムカームは十二種類ある。しかし、十二種類の旋法があるわけではない。本研究で分析したように、ウイグルのムカームは組曲の形式名であり、各々のムカームの中には数多くの曲と様々な旋法が含まれている。ムカームの音階は必ずしもオクターヴを基礎とはしていない。むしろ、テトラコード(四度枠)やペンタコード(五度枠)を基礎として、これらが結合していると考えられる。また、「主音」と「終止音」はかならずしも同じ音ではないことがしばしばある。

ところでムケッディメ(それぞれのムカームの基本的な音楽および旋法を提示するために必要不可欠な序曲)の部分で提示される旋法を見ると、長二度と短二度音程が最もよく使われている。その次は中立二度(長二度と短二度の中間音)である。増二度音程は一ヶ所であられるだけである。つまり、七音音階を基準とする旋法である。しかし、理論としての一オクターヴと言う概念は、ウイグルムカームにとっては重要ではない。なぜなら、西洋音楽と異なり、オクターヴを単位として同じ音程関係が反復されるという考え方をしな

いからである。実際、一オクターヴ上では別の音を使うほうが普通であるようなムカームもある。本発表では、十二ムカームのうちチョン・ナグマのムカッディマを考察対象とする。

さらに、西アジアの旋法を比較対照とし検討をおこなった。西アジアのマカーム旋法でも微分音をしばしば用いることはよく知られている。その微分音の位置は、曲の進行に伴い変化することはあるが、基本的には旋法によって決まっており、即興的に変化するものではない。ちなみにウイグルの音楽は、即興性の強い部分とそうでない部分とがあり、即興的な部分では、演奏者が異なることによって、微分音の個所も異なることがある。

ウイグルムカームは、基本的構造の点では、西アジア音楽の影響をもっとも強く受けているといえる。それは、ムカームの名称の類似、テトラコードやペンタコードを基本的な骨格とし、オクターヴの概念を重視しない点などの共通性からも明らかである。しかし、ウイグルムカームには、中国の五音音階や西洋の調性音楽の影響も見られる。

また、ウイグルムカームでは微分音の使い方が西アジア音楽ほど規則的ではない点が注目される。西アジアでは音楽理論の歴史が長いので、微分音の使い方が固定されていた可能性があるが、ウイグルでは旋法理論が確立しなかったため、演奏者の自由度が高いのかもしれない。これらをふまえて、今後ウイグルの音楽の旋法の研究をさらに進め、理論化していきたい。

(報告・瀧知也)

アブドセミ氏の提起された「十二ムカーム」の音組織と旋法をめぐる新説は、三つの大きな意味をもつように思う。一つは、これまで関連用語を含めて正確な知見には至っていなかった十二ムカームについて、各曲を熟知しているウイグル伝統楽器演奏家(氏自身)によって分析・検討がなされた点。

二つは、西アジアの「マカーム」との近似性と相違点を事例的に明らかに示した点。第三点は、十二ムカームを美学的に論ずる場合にも、氏の分析が具体的検証として有効と思われる点である。

即興的な微分音を含む装飾音「潤音(*puqaq*)」の実現傾向や、中・低音域から高音域に段階的に至るオクターヴの範囲を超える旋律運動なども十二ムカームの個性として浮かび上がってきた。これらの特徴は近隣の中央アジア諸民族の伝統音楽の理解の上でも有益な示唆となる。酷似と差異がよく判ったが、音源についての説明と、イラン古典音楽とのみ詳細に比較した必然性についてももう少し言及がなされればさらに説得力が増したと思う。

2. 歴史を営む—南アフリカ・グリクワの人々の〈うたうこと〉をめぐる民族誌—

海野 るみ(お茶の水女子大学大学院)

(発表要旨)

本研究では、南アフリカ(以下、南ア)のル・フレーのグリクワの人びとにとって「グリクワの歴史」とは何かを、彼らが「誰でもでき」「普通のこと」と語る「うたうこと」に注目して検証した。

「グリクワ」とは、18世紀後半ケープ植民地境界地域に多様な出自集団からの離脱者らによって形成された諸共同体に属した人々と子孫たちの総称である。なかでも、「ル・フレーのグリクワ」の人びとは、20世紀前半に自立的なグリクワの共同体を建設しようとしたA.A.S.ル・フレー1世やその後継者並びに支持者たちのグループである。

ル・フレーのグリクワの人びとにとって「グリクワの歴史」は日常的に「営むもの」と認識され、さらにこれは語ることと生きることの二側面で捉えられる。語られる歴史

としての特徴は、①集団的な過去の経験を目前の課題に結びつけて解釈すること、②声に出す行為、③共有することの三点である。集団的な過去の経験はグリクワの歴史の基盤となる知識群で、幼児期よりシステム化された学習や日常経験のなかで学ばれる。声に出す行為には語る、祈る、うたう、うなづくなどが含まれるが、特に彼らは「合唱こそ歴史である」と強調する。こうした行為は複数の人たちが共にいる場で行われ「歴史」として成立する。その際、語り手と場を共有する聴衆とは常に対話的で、聴衆は語り手に応答することで合意と共有を示す。一方、生きられる歴史は人びとの暮らし方、生き方である。彼らは歴史を手掛かりに居住や労働の場所を決め、日常的な問題を解釈し解決する。

「グリクワの歴史」の特徴は四つの問題を開示する。第一に歴史概念の多義性についての問いであり、書くことで統合され一つの物語として保存され固定化されるものとしての歴史という一般化した歴史の概念を問題化する。第二は歴史の多声性の問題であり、特に南アの社会形成史としてのマスターナラティブに対する多声化、及びグリクワの歴史の「仕方」を巡る複数性の提示の可能性を開示する。残る二つの問題はオング(1992)の『声の文化と文字の文化』の議論に依拠する。一つめは、オングが声を「ことばになる声」と捉えたのに対し、「音としての声」を捉えるというオラリティの二面性に着目する必要性への問いである。二つめはオラリティとリテラシーの関係性についての示唆である。オング以来、段階的で時代的な移行と捉えられてきたオラリティとリテラシーの関係性に対して、ル・フレーのグリクワの人びとの実践はオラリティとリテラシーを使いこなす人々の実践とそれを取り巻く社会的な状況の研究の必要性を提示しているのである。

(報告・丸山洋司)

南アフリカのル・フレーのグリクワの人びとが、「グリクワの歴史」をいかに想像し、学び、営んでいるのか。この問題について海野るみ氏は、1996～97年の「過渡期の南アフリカ」での現地調査を通して得たデータに基づいて検証した。

グリクワの人びとは、「歴史」を「知識」と「やり方」をセットにした「知識群」として学ぶ。例えば、預言者の生い立ちや、預言者と神との関係といった「知識」は、讃美歌を「自由に」みんなと「一緒に」「合唱」するという「やり方」とセットにして学習される。また歴史の語りは、孤立した話し手によって、沈黙している聴衆たちに向かってなされるというよりは「騒がしい」聴衆と話し手との間のコミュニケーションを通して共有される。

フロアからは、グリクワの人びとの共同体に讃美歌が導入される際、歌詞内容に変化が見られたか否かに関する質問があった。この点について海野氏は、歌詞内容の変更はみられないと述べた。海野氏が今後の課題としてあげた「アパルトヘイト時代におけるオラリティとリテラシー」の問題は興味深く発展性のあるテーマであり、今後のさらなる研究が期待される。

3. 11世紀から13世紀の法会における奏楽—四部楽と三部楽の研究—

鳥谷部 輝彦(東京芸術大学大学院)

(発表要旨)

雅楽(唐楽、高麗楽など)が奏された行事には、宮廷行事と共に寺院法会が大きな比重を占めてきた。寺院法会の中でも舞楽法会における雅楽については、研究の土台が築かれている。従来の理解による舞楽法会の歴史的推移は、最初に8世紀東大寺大仏開眼供養会で種々の楽が奏され、次に9世紀東大寺御頭供養会から四部楽(舞人楽人が四つの

集団に分かれて奏舞奏楽する形)が採られ、さらに平安時代(主に11世紀)に二部楽(舞人楽人が左方と右方の二つの集団に分かれて奏舞奏楽する形)が確立し、それ以降、現代の四天王寺聖霊会まで、あらゆる法会で二部楽が普及した、とされる。しかし史料によれば、四部楽または三部楽(舞人楽人が三つの集団に分かれて奏舞奏楽する形)の法会も少数ながら中世に行われていた。

現存史料によると、四部楽の法会と三部楽の法会の中世に四例あることがわかる。この四例は「舞楽四箇法要」という種類に含まれ、本研究の分析対象とした。それらは、四部楽は東大寺供養会(鎌倉再建期の開眼または落慶の法会)と石清水放生会、三部楽は東大寺花厳会と興福寺常楽会である。このうち、常楽会と放生会は日本国第一、二の大規模を見せた法会であったが従来の研究では見落とされてきたため、舞楽法会の歴史的推移も検討する必要がある。

分析に当たって、「部」(新楽、高麗、古楽(胡楽)、林邑、童楽など)と「方」(左、右)を区別した。また、奏舞(舞と楽器演奏)よりも奏楽(楽器演奏のみ)に着目したが、それは奏楽のほうが僧侶の所作と密接に関連しており、法会全体の構造を分析するのに適していると考えたからである。その上で、奏楽を「部」ごとに分け、奏楽の空間的配置(楽屋配置と奏楽の移動経路)を図示し、奏楽の時間的配置(次第)を表表することとした。

今回の発表では、論文の中から三点を説明した。第一点は建久6年東大寺供養会における会場の配置と行道の様子(道順、および楽と声の響き)、第二点は東大寺供養会は古代(貞観度)の四部楽と中世(建久度)の四部楽が異なる原因、第三点は中世の四部楽の法会と三部楽の法会とでは①会場配置、②部と左右の関係、③次第の構造の三側面によって音楽的設計が異なること、である。

(報告・藤田りん子)

鳥谷部氏の発表は、「法会の始終に渡って、奏舞よりも奏楽のほうが、僧侶の所作に密接に連動している」という見地から、舞楽四箇法要の奏楽に焦点を絞り、従来取り扱われなかった事例をもとに、四部楽・三部楽を分析するという試みであった。これまでの研究では舞楽法会の舞楽に重点をおいた分析が主流であったが、楽器演奏に注目し、図表を用いた空間的な動きや配置を示しながら法会の様子(全体像)を捉えようとした鳥谷部氏の視点は大変有意義であり、また興味深いものであった。

しかしながら、当時このような法会が実際にはどのように執り行われていたか、具体的(視覚的・聴覚的)イメージを発表内容から察することは困難であったためか、発表後、フロアからの質問は主にこの点について集中した。

4. アレクサンドル・チェレプニンと日本の作曲

—1930年代の洋楽創作における「日本」—

熊沢 彩子(東京芸術大学大学院)

(発表要旨)

本発表は、同名の学位論文の内容に基づく発表として、1930年代の日本における、ロシア人作曲家アレクサンドル・チェレプニンの日本人作曲家たちへの影響を明らかにするものである。彼はペテルブルクで作曲家ニコライの息子として生まれ、革命を逃れて1918年にグルジア、1921年にパリへと移動して活動した。1934年から37年まで、中国や日本を往復して過ごし、この間に日本人作曲家と交流している。戦後は主にアメリカで過ごし、作曲活動や教育活動を行い1977年に死亡した。発表では、日本におけるチェレプニンの活動を、つぎの三方向から考察した。それは第一に、チェレプニンが日本人作曲家との会合に際し、彼等に対して発した啓蒙的な言説の内容とその影響、第二に、チェレプニン

作曲コンクールの開催やチェレプニン・コレクションと呼ばれる楽譜集の発行などの諸事業、第三に、とくにチェレプニンとの交流の場面が多かった作曲家団体である新興作曲家連盟の発展とその活動の変化である。このチェレプニンの来日と、日本人作曲家への様々な支援、そして、それに関連する新興作曲家連盟の発展は、この時期の日本の作曲の地平において、ある変化をもたらした。それはまず、この時期以降の日本における作曲活動の活性化が挙げられる。またこの頃を境に、日本の作曲に対する評価基準も変化を見せる。以前日本における作曲の価値基準は、ヨーロッパ、とくにドイツをルーツとするアカデミックな作曲技法を体現していることであったが、チェレプニンの諸事業以来、別の価値観が出現する。それは、欧米での紹介そのものに権威を見出す態度である。そして海外とのつながりを意識した作曲家たちは、「日本的」な性格を有する作品を創作する傾向にあった。このような作曲の状況からは、以前の西洋のアカデミックな技術の習得にしろ、西洋の評価を意識するにしろ、結局括弧付きの「西洋」の権威がそれぞれ別の形で顔をのぞかせるという、極めてねじれた意識が存在することがみとれる。一方、このような1930年代の作曲の状況は、作曲家が自身のナショナリティを含むアイデンティティに自覚的になった最初の段階ともいえるのである。

(報告・中村真由子)

本発表は、1930年代5回にわたって来日したチェレプニンが、その滞在中に行った日本人作曲家との交流や事業を通して、日本の作曲界にどのような影響を及ぼしたかを論ずるものであった。熊沢氏の報告は、当時の日本の作曲界が直面していた創作理念をはじめとする諸問題について、日本人作曲家たちの言説や資料を丹念に調査した上で明らかにし、歴史的な文脈の中で1930年代の状況を位置づけた点で、

説得力のある大変意義深い内容となっていた。質疑応答では、チェレプニンの音楽的素養は極東を知ってから初めて身につけたのかという問いがあり、35歳で極東を訪れる以前にインドのアジャンターを題材としたバレエ音楽を書いているように、もともと東洋に対して強い憧れがあったと答え、チェレプニン自身の思想的背景にユーラシア主義の影響があったことも指摘した。また、チェレプニン楽譜に載っている曲は当時の日本人に周知されていたのかという質問に対しては、音楽雑誌には大きく取り上げられていたので、その読者層には知られていたと回答した。

◆東日本支部第45回定例研究会 (日本音楽学会関東支部特別例会と合同)

時 2009年7月4日(土)午後2時～4時30分

所 大東文化大学 板橋校舎1号館3階 1-0301 教室

テーマ 〈キリシタン音楽をめぐって〉

司会 奥山 けい子(東京成徳大学)

●展望

キリシタン音楽研究の可能性

千葉 優子(慶應義塾大学)

(発表要旨)

今回の定例研究会はキリシタン音楽をテーマとしたものである。キリシタン音楽研究の起点は、キリシタン音楽や楽器の実体を解明することであり、未だ不明な点が多々あるものの、今回発表される研究は、これらとは異なる視点による研究である。それは日本が西洋という全く異質な文化と出会ったものの、禁教、鎖国によって遮断され、しかも鎖国中も一部グレゴリオ聖歌の伝承が続くなどキリシタン音楽のもつ特

殊性ゆえに、その研究の可能性が広範なことによる。こうしたさまざまな研究の可能性については、すでに『東洋音楽研究』第55号で提言したので、今回は特に、近世邦楽史料としての南蛮史料について述べ、拙著『箏曲の歴史入門』等で胡弓とキリシタン音楽との関係を示す史料として提示した『難野郎古たみ』の挿図なども加えて、胡弓の起源に関する考察も試みた。

キリシタン期は、ちょうど三味線の誕生など江戸時代に開花するいわゆる近世邦楽の萌芽期に当たるが、それらに関する日本人による同時代史料がほとんどない。現在通説とされているものの多くは、後世の文献をもとにした説だが、こうした文献には権威付けのための説話が少々含まれており、これら通説は再考されるべきだが、その際、南蛮史料は有用である。ただし、内容によっては著しく教化的であったり誇張が見られ、厳密な史料批判を要するものの、反面、宣教師たちは効率よく布教するために、いわば文化人類学的方法で当事者とは異なる準拠で当該地の文化を調査研究しており、その視点は有用である。

さて、南蛮史料における胡弓だが、その名称はない。しかし、『日葡辞書』(1603、1604)に「Azzumagoto」は viola de arco に、「Vagon」は rabeca に似た楽器と記されており、これは宣教師が南蛮楽器とは異なる擦弦楽器を目撃していたものの、雅楽の実体を知らなかったためにおきた混乱によるものと思われる。一方、現代の胡弓は中小先の長い小型の三味線で、さらに日本での「小弓」の初出が『時慶卿記』の慶長14年(1609)の条で、その頃すでに三味線が流布していたことが『羅葡日対訳辞書』(1595)や南蛮屏風などからも確認できる。そこで、楽器としては三味線をもとにしつつ、南蛮擦弦楽器からの発想で擦弦という奏法を得たもので、『難野郎古たみ』の挿図はその傍証となりうる。ただし、薩摩藩と琉球の関係を考えて琉球の影響も否定できず、また草野妙子

が推察したように朝鮮通信使によって擦弦楽器を目にした可能性もある。そして当初、遊女や歌舞伎関係者、放浪芸能者などがこの楽器を手にしたことを考えると、その発想の源を何か一つに限定すべきではないのかもしれない。それゆえの『糸竹初心集』での混乱とも考えられる。

(報告・野川美穂子)

日本にキリスト教が伝来し、キリシタン音楽が鳴り響いていた16世紀半ばから17世紀初頭の時期は、日本音楽史では中世から近世への変換期にあたる。千葉氏の発表は、その点に着目したものであり、「近世邦楽資料としての南蛮資料の有用性と問題点について述べる」という前置きから始まった。ただし、発表の大部分は、変換期に登場した胡弓の起源の考察にあてられ、関連資料に対する千葉氏の解釈が丁寧に説明された。しかし、考察のための資料の多くが南蛮資料ではなかった点で、発表タイトルと発表内容との齟齬に違和感を抱いたことは否めない。また、円形の胴の胡弓を描いた江戸初期の風俗画など、胡弓に関する近年の研究成果が盛り込まれていない点も残念であった。発表後には、キリシタン音楽と胡弓の音楽との関連の有無、「小弓」「鼓弓」「胡弓」などの文字表記の歴史、胡弓の皮に関する江戸期の文献などについて、質疑応答が行われた。「南蛮資料の有用性」を主張する千葉氏の言及は重要であり、今後の研究を期待したい。

●研究発表

1. 胡弓とrabeca —ソフトとしてのキリシタン起源説—

神戸愉樹美(国立音楽大学)

(発表要旨)

胡弓の起源にはさまざまな説があり、未だに決定的な結論には至ってはいない。その一つであるキリシタン起源説

は、『糸竹初心集』に「らへいかのなく声、小弓の音に少しもちがはざる」と書かれ、キリシタン文書に記された楽器名 rabeca(らべか、ヴァイオリンの葡語)と音が似ていることから消えては復活している。この記述は、江戸期以来綿々と受け継がれながらも導かれた起源説はさまざまで、謎は深まるばかりである。私は、その理由が、楽器としての胡弓、つまりハードばかりを追及してきたかことによると考えた。本の出版や楽器の誕生には必然性があり、その時代を映し出しているはずである。日本人が日本唯一の擦弦楽器である胡弓を、「なぜ誕生させたのか」、「なぜ音の繋がる楽器に憧れたのか」、具体的な楽器の構造や奏法はひとまず置いて、ソフトとしてその必然性の道筋を示す例をキリシタン文書から紹介する。

今まで、キリシタン文書の擦弦楽器名 viola de arco(ヴィオラ・デ・アルコ、ヴィオラ・ダ・ガンバの初期の名称)や rabeca の精査を踏まえた研究や、背景にある16世紀西欧の擦弦楽器事情を反映させた考察もなかった。ここを踏まえてキリシタン文書を「虫の目、鳥の目」で読み解くと、キリシタンの弓奏擦弦楽器が五畿内で広く知られた経緯が浮かび上がる。つまり、豊臣秀吉の天正遣欧少年使節の謁見で violas de arco と rabeca が演奏され、喜びのうちに謁見が成功し、人々がたてた良い噂が折から流行していた南蛮趣味に後押しされていたのだと考えられる。このことが禁教後も70年に渡って広く語り継がれるほどの「憧れ」を代弁していたために、『糸竹初心集』の三味線の由来書きに取り込まれたのではないのか。キリシタンの violas de arco を伴ったミサの調べや、天正遣欧少年使節が持ち帰った rabeca と歌の素晴らしさが、音の繋がる楽器への憧れを醸成し、胡弓誕生の素地を作ったと結論付けた。「胡弓のソフトとしてのキリシタン起源説」である。

(報告・野川美穂子)

『糸竹初心集』(1664年)の「らへいかななく声。小弓の音に少もちがはざる故」という一文は、キリシタンの擦弦楽器「rabeca ラベカ」が胡弓の起源である可能性を示す資料として知られている。神戸氏の発表は、キリシタン楽器と胡弓との関連を、楽器の奏法や構造(これを神戸氏は「ハード」と呼ぶ)ではなく、楽器が誕生した背景(これを神戸氏は「ソフト」と呼ぶ)から考察しようというものであった。考察にあたっては、宣教師の報告や『日葡辞書』から擦弦楽器に関する記述を抽出し、豊臣秀吉の天正遣欧使節謁見前後の状況を、当時の公家の日記や宣教師の報告から読み取るという方法がとられた。この方法は、神戸氏の発表の直前に千葉氏が主張した「南蛮資料の有用性」を具体的に試行するものであり、興味深い内容が指摘された。発表後の質疑応答では、西洋および日本の楽器における貴賤の意識、ハードとソフトの起源説の関係、朝鮮通信使や琉球使節が所持する擦弦楽器との関連などが話題になった。

千葉氏と神戸氏の発表には、楽器は変化するものであり、奏法や構造(神戸氏の言う「ハード」)にこだわりすぎると起源を解明できないという考えが根底にあるように感じる。その考えを全面否定はしないが、仮にそうであるにしても、日本の胡弓と奏法や構造が類似するアジアの楽器への言及が多少なりとも欲しかった。

2. 長崎県岳路における法要の光景—その悲しみが共有されるとき—

島 忠久(聖徳大学大学院)

(発表要旨)

長崎県長崎市蚊焼町岳路はかつて隠れキリシタンであったというが、隠れキリシタンという歴史をもつ岳路に現存する念仏というのが本研究の視点である。隠れキリシタンという視

点だけに捉われることなく、また、その視点だけで念仏の真価を問うものでもない。むしろ、隠れキリシタン信仰の消滅と念仏信仰の伝承という地においてこそ、普遍的な庶民信仰のあり方を導く重要な要素が含まれていると考えるが、ここでは、現在、岳路の人たちが、かつて東檜山の隠れキリシタンが唱えていたという歌念仏の経本をみながら念仏を唱えていることから、両者の比較を通して、岳路の念仏の位置づけ及び機能に焦点をあてる。

岳路の念仏がいつごろはじまったのか定かではないが、念仏の「原本」には、「安政四年／大正三年」などとあり、また、明治にはいって、隠れキリシタンをやめて、禅宗に改宗したときにつくられたともいわれている。岳路に現存する念仏の特徴として次の点をあげる。①御詠歌組と呼ばれる女性たちが中心となって念仏を唱える。②男性は唱えない。③檀那寺の住職と一緒に唱えない。④念仏の後、御和讃を唱える。

③を除いては東檜山の歌念仏と対照的である。歌念仏を男性だけで唱えていたのは、「キリシタンの大切な祝日の行事は、すべて、男だけで取り行う」とされ、また、歌念仏のあと、「ひそかにコンチリサンのオラシヨ(Oratio)を唱えている」というものである(正木 1966/1979:71)。

法要の場において、御詠歌組が中心となって念仏と御和讃を続けて唱えるのは、相互に肯定的な関係が示唆されてくるばかりか、念仏の機能をもみることができよう。岳路のA氏によれば、いまから10年くらい前から地蔵寺住職から詠讃歌を習うようになったが、それまでは念仏のみであったという。その時代から有する機能を具現化し、念仏の性格を露にする光景ともいえる。

S家の法要にて地蔵寺住職は、「供養とはまごころを手向ける」という。岳路の念仏が唱えられるとき、経文や詠讃歌とは異なり、住職は念仏と一緒に唱えないが、少なくとも死者

の供養という意味においては、いずれも有難いものであろう。地元の人たちから念仏について、隠れキリシタンとの関係を聞くことはできなかったが、岳路のA氏は夫を亡くしてから、また、B氏は母と夫を亡くしてから念仏をはじめようになったという。詠讃歌がそうであるように、念仏もまた一人では唱えられない。法要の場において念仏と一緒に唱えられるとき、その悲しみは念仏をお願いした遺族と共有され、ただ純粋に、先祖代々受け継がれてきた有難い念仏でもって、念仏供養の一形態を成すものであろう。

(報告・新堀敏乃)

本発表は、長崎県岳路で行われる追善供養の法事の実態を、隠れキリシタン信仰と念仏の関係から考察するものであった。発表者によれば、岳路でかつて歌われていたと言われる隠れキリシタンの歌を現在では聴くことができず、代わりに念仏やご詠歌が法事において重要な位置を占めている。それゆえ、岳路の法事における隠れキリシタン信仰の直接的な影響を指摘できないというのが、発表者の主張であった。隠れキリシタン信仰と念仏の関係を論じる意図のもとではやや弱い主張であったが、発表者の狙いは、先行研究が隠れキリシタン信仰の直接的な影響を受けた要素のみを追いかけてきたのに対して、念仏やご詠歌などの異なる要素にも目を向ける必要があると主張することにあったと考える。この点を強調するためには、念仏やご詠歌がいかなる経緯で岳路の地に受容され、既存の隠れキリシタン信仰といかなる関係を築いてきたのかを丁寧に整理する必要があるだろう。発表の終わりに念仏の録音が流され、フロアからは念仏を伝える人々の集団組織の実態、念仏の音楽的特徴、岳路における隠れキリシタン信仰の痕跡などに関する質問があった。

◆東日本支部第46回定例研究会

時 2009年9月5日(土)午後2時～4時30分

所 お茶の水女子大学 本館306教室

司会 近藤 静乃(東京芸術大学)

●史料報告

(1) 後崇光院筆『朗詠九十首抄』

(2) 鍋島本〔東遊歌図風俗〕

福島 和夫(上野学園大学日本音楽史研究所)

(発表要旨)

(1) 後崇光院筆『朗詠九十首抄』は、1948年旧重要美術品指定時に東博で展示、近藤喜博論文で紹介された後、1950年頃より所在不明となっていたが、この程、天理図書館現蔵が判明、2008年11月17日、飯島一彦氏(獨協大学)と筆者が調査した。近藤提起の問題点「後崇光院は応安本と嘉慶本の2本を書写後、応安本奥書の後に、嘉慶本末尾の増補1首1行(山遠云々)と奥書以下を切継ぎして1本に合成」説について、飯島氏は『ビブリア』131号(2009.5)掲載論文で全面的に否定している。筆者も近藤説は反対であるが、当該紙継部分の現状に対しては、書写時のままではなく、相当な期間を経て紙継前後の料紙に汚れ変色が生じた後に後紙変色部分を除去し、貼り継いだと考える。同時に切継部分の行間にも違和感を持つ。再調査が必要であろう。

(2) 鍋島本〔東遊歌図風俗〕。展覧「国宝催馬楽譜と雅楽の世界」鍋島報効会徴古館(佐賀市)。2008年12月～本年1月。重文『東遊歌神楽歌』、「新発見・初公開」の『東遊歌風俗歌』を含む20点出陳。2月3日調査。成立、伝来、装幀、修理、状態等よりみて、本史料と『東遊歌神楽歌』計2軸はソレとして伝存したものと推定された。しかし後者の旧国宝指定(1933)後、本史料はその存在すら忘れられた。江戸中期

以降この2軸からの転写本は『楽章類語鈔』の典拠となり、また賀茂真淵書写本は本居宣長を経て国学者間に流布して夥しい数の転写本を生み、「東遊歌図」「風俗」は『群書類従』管絃部にも収載され広本となった。しかしその本文は転写を重ねて注記等の竄入も多く、校訂を必要としたが、善本を欠く状況であった。今回その祖本が発見されたのであるから、研究史上の意義は大きい。当面の問題は今回新規に付された名称『東遊歌風俗歌』である。鍋島本2軸には、1軸に神楽歌、他の1軸に風俗があり、両軸双方に東遊がある。従って双方ともに「鍋島本東遊歌」ではどちらの東遊であるか識別ができない。これでは今後の研究における引用・言及等に際して、混乱が生じるのは必至であろう。また流布本との関係も判らない。本史料の書き出し「東遊歌図」の意味の不明確さと、同軸前半に「歌図」と「東遊」があることからであろうが、流布本の多くは「東遊歌図」であり、その祖本が事更に混乱を招くような新名称を用いるべきではなく、善処を要望したい。私案は〔東遊歌図風俗〕。

(報告・青柳隆志)

文献学者の永遠の夢は、ミッシングリングの如き資料がある日忽然と姿を現すことである。

今回報告された二つの文献は、転写本が存在し、未知の新資料というわけではないが、「祖本」と称するに相応しい価値を有する。国文学者の来聴も多かった。

「朗詠九十首抄 後崇光院本」は、重要美術品の指定を受けて以後行方が知れず、模写本で研究が進められてきたが、実は昭和25年に中山正善氏の所有となり、天理図書館に所蔵されていた。平成20年の修理を契機としてのいわば僥倖というべき発見であり、奥書の状況からは、同本の複雑な成立過程を知る手がかりが得られる。

「鍋島本〔東遊歌図風俗〕」は、平成20年の国文学研究資

料館の調査でその存在が明らかになったもので、重要文化財「東遊歌神楽歌」(平安後期)と同筆のツレであることが確認された。群書類従「東遊歌図風俗」のまさしく原本であり、江戸期に鍋島家に入ったと見られるが、今日までその存在が知られなかったことは一種の奇跡に属するであろう。福島氏、飯島氏のご紹介に感謝したい。

●研究発表

音楽史料としての『古今著聞集』—原拠および楽書との関係について—

櫻井 利佳(上野学園大学日本音楽史研究所)

(発表要旨)

本発表の目的は、著名な文学作品である一方で、音楽史料としては十分に顧みられて来なかった『古今著聞集』が、今日の実証的音楽史研究に耐えうる記録的価値を有し、実は音楽通史の萌芽的存在であることを示すことにあった。

『古今著聞集』には巻六 管絃歌舞篇以外にも多くの音楽説話があるが、中でも祝言篇は院政期における文化史上最も重要な晴儀のひとつである上皇算賀が収められている点に着目し、その一例として第451話、鳥羽法皇五十賀を取り上げた(以下「仁平御賀」と称す)。

仁平御賀については『仁平御賀記』(宮内庁書陵部蔵『管見記』第三巻)と『兵範記』(陽明文庫蔵)とに記録がある。両記録と第451話とを対照させた結果として、主に次の三点を指摘した。①その殆どが『兵範記』に依拠している一方で、『仁平御賀記』を利用した痕跡がみられないこと、②第451話は『兵範記』中、特に音楽関係記事だけを抄出している。すなわち御賀全体ではなく、そのなかの音楽のみを記録する意図があったこと、③中院家による《胡飲酒》奏舞は、前話である第450話と

もに、御賀の象徴的存在かつ音楽史上記念碑的存在として編者成季が特に注目したものであり、まさにそれが説話の採録理由であることを述べた。

具体的には、御賀後宴の奏舞で左右の番が崩れている原因が、まさに《胡飲酒》上演にあると推論した。すなわち、既に御賀には不可欠となった中院家の《胡飲酒》童舞であったが、御賀当時、童舞に合う年齢の子がおらず、師仲の子 雅仲を一時的に養子として《胡飲酒》を伝授した。しかしもう一人の舞童である隆成は左舞の《陵王》しか舞わず、童舞二曲とも左舞では偏り過ぎるために《陵王》と《納蘇利》(雅仲)の番を行うのに加えて、《胡飲酒》を番舞なしのまま奏演したのではないかと論じた。当時そうまでしても中院家の《胡飲酒》はなければならぬ演目であった。

『著聞集』編纂当時、すでに中院家の《胡飲酒》は絶えていた。しかし編者は、かつては確かに伝承され、上皇御賀に不可欠な要素であったことを認識し、記録として書き残した。

(報告・豊永聡美)

本発表は、『古今著聞集』が実証的な音楽史料であることについて、「祝言」の説話、とりわけ仁平二年の鳥羽法皇御賀に視点を当てて緻密な考察を行った興味深いものであった。

特に筆者に印象的だったのは、御賀における舞の一つ「胡飲酒」が中院家の童が舞うべきものであり、『古今著聞集』の著者橘成季もこのことに強い関心を有していたということであった。歴史学研究では、童舞は御賀に欠かせない舞であり、皇親や五位以上の貴族子弟が舞手として選抜され、見事に舞い天皇から御衣を下賜されることが栄達への近道であったと指摘されている。童舞の演

目としては「陵王」や「納蘇利」もあるが、どのような場合に「胡飲酒」が舞われるのか、中院家の場合にも「胡飲酒」を見事に舞うことが他家と同様に栄達につながったのかなども知りたいところである。いずれにせよ、管絃歌舞や祝言の巻に留まらず広く音楽記事を精査し、個々の説話が如何なる史料に基づいて書かれたものであるかなど『古今著聞集』における音楽史研究が進展することを期待したい。

会員の声

●彦根博物館展示「日本の楽器・琵琶-井伊家伝来雅楽器から-」のお知らせ

彦根城博物館で下記の通り展示があります。

「日本の楽器・琵琶-井伊家伝来雅楽器から-」

2009年12月3日(木)～12月22日(火)

井伊家伝来の琵琶〔びわ〕は29面もの多くを数えます。この中から、鎌倉～江戸時代の代表作を紹介します。

(高桑いづみ)

●杉並区立郷土博物館特別展「大田黒元雄の足跡-西洋音楽への水先案内人-」のお知らせ

杉並区立郷土博物館で下記の展示を開催中です。

「大田黒元雄の足跡-西洋音楽への水先案内人-」

2009年10月17日(土)～2010年1月11日(月・祝)

西洋音楽の普及に努めた音楽評論家・大田黒元雄

(1893～1979)の足跡を振り返る、没後30年特別展です。

(葛西周)

会員の声 投稿募集

1. 次号締切: 2010年2月15日 (3月上旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

学会本部事務所(郵送、Fax またはメール)

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307号

Fax: 03-3832-5152 E-mail: LEN03210@nifty.com

3. 字数および書式: 25字×8行程度(投稿者明記のこと)

4. 内容: 会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、書籍出版、展示、見学会
など、会員の皆様に知らせたいと思う情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望

*原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただくことがありますので、ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

編集後記

この度、東日本支部だより21号を無事にお届けできるとなりました。発表者の皆様をはじめ、お忙しい中、報告執筆をご担当くださった皆様、どうもありがとうございました。

今年は9月にも定例研究会が行われ、今号に9月例会の発表要旨および報告を掲載しております。

また例年、定例研究会の発表要旨は、例会後の支部だよりに掲載しておりましたが、今後は例会前に発表要旨を東日本支部ウェブサイトにも掲載する予定です。皆様にはウェブサイトのほうも是非ご覧頂き、例会へ多数ご参加頂けますようお願い申し上げます。

東洋音楽学会 東日本支部 定例研究会案内ウェブサイト:

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog/higashi/regular.html>

発行: (社)東洋音楽学会東日本支部

編集: 塚原康子、岡崎淑子

近藤静乃、鳥谷部輝彦、山下正美

〒110-8714 東京都台東区上野公園 12-8

東京芸術大学音楽学部楽理科 塚原研究室気付

Tel: 050-5525-2357・2350 Fax: 050-5525-2522

E-mail: tsukahar@ms.geidai.ac.jp (塚原)
